

JACET に育てられて・・・

森永 正治

1969年秋に初めて大学英語教育学会に参加した27歳の時から古稀の今日まで43年間、陰に陽に、全国各地の先生方にお世話になってきたことになるが、とりわけ、第5回及び第10回夏期セミナーの参加者各位と北海道支部の先生方には、改めて、衷心より感謝申し上げる。

とにかく「英語教育学」の何たるかも全く知らずに「英語科教育法」という授業を担当し始めたのだから、恐ろしいことである。しかしながら、JACETの先生方の温かい御指南のお陰で、少しずつ成長(?)し、英語教育の世界を満喫できたことを、本当に嬉しく幸せに思う。

北海道支部では、2002年栗原豪彦先生から支部長のタスキを受け取り、2年後に西堀ゆり先生にそのタスキをつないだことになるのだが、何とか任務を遂行することが出来たのも全て会員及び役員各位の熱意のお陰であった。そもそも、本来ならば、釧路の牧野高吉先生が担って下さる筈の役目を、先生を襲った不幸な出来事のため、私が担うことになったのである。全国学会に出席する度に、故小川芳男会長から「北海道はお髭の人が多いですね？」等と話しかけられたことも牧野先生との懐かしい思い出である。研究会や大会の度に、勉強や研究の話の他、冗談や雑談に話の花を咲かせて下さった多くの先生方の友情に感謝である。

支部大会で思い出に残っているのは、2003年の大谷泰照先生の御講演「日本の言語教育政策を問い直す」である。日本人の親米・反米40年周期説に基づく英語教育の歴史のお話は、これから先の英語教育も予言しているようであった。大谷先生は本年『時評：日本の異言語教育 ---歴史の教訓に学ぶ---』を出版された。2004年の田中春美先生の「World Englishes 研究の歴史・現状・問題点」という御講演も忘れられない。お人柄の溢れる手書きの資料が今でも私の手元で、興味深いお話の余韻を語っている。また田中先生も本年、幸子夫人との共編著『World Englishes 世界の英語への招待』を出版された。北海道支部と縁の深い先生方が、いつまでもお元気で御活躍下さるのも嬉しいことである。

支部長や理事を経験した人は全国大会で招待講演をしなければならないという暗黙の約束のようなものがある。何度もお断りしてきたが、第二の職場も間もなく去る予定であることから引き受けざるを得なくなり、河合靖先生のお骨折りで、本年名古屋で実現することになり、神保会長、馬場実行委員長等の連名で依頼文書が到着した。「招待講演」ということは旅費なども支給されるのであろうかと心配したが、「懇親会のみ御招待」ということで安心した。演題とサマリー、バイオデータの締め切りが5月31日、プロシーディングズの締め切りは7月31日、依頼文書にはそうあった筈なのに、やがて後者の締め切りも前者と同じ5月末日であることが判明し、大いに慌てたのも楽しい思い出となった。

Men, Materials & Methods in Retrospect と題して当日を迎えたが、会場には AILA99 の研究発表の時を上回る聴衆が来てくれてびっくりした。敬愛する横山吉樹先生が司会をして下さった。爺馬鹿ぶりを発揮して、孫 Hali の発した *Midori is green in Japanese*. から話し始めた。Men では、小学校時代や高校時代、大学時代の恩師に続き、小川芳男先生や、小池生夫先生、筧寿雄先生のこと等を話した。Materials では、ワーズワースの水仙、虹、カッコーの詩と関連する歌、落語「芝浜」等を演じているうちに、制限時間の50分を経過してしまった。最後の Methods には触れずに終了するというお恥ずかしい結末であった。幾つになってもしっかりと話が出来ないという特技はまた繰り返されてしまった。

(いくら粗末な話であったとしても、10月も終わろうとする今日まで、大会関係者から一言も来ないのは、少しおかしい気がするのだが・・・)

JACET について心配なのは、折角入会してくれたのに長続きしない先生方や、いくら誘っても、始めから全く入会の意志を示してくれない先生方が身近にいることである。JACET が原点である大学英語教育にしっかりと立脚することが求められているのであろうか。小中高の英語のこと等、脇道にそれたり、よそ見をしている暇はないようである。

私が北海道支部に貢献したことと言えば、現事務局幹事の内藤永先生を JACET にお誘いしたことであろうか。元気のいい、熱意あふれる先生方が多数集結してきた北海道支部が、ますます充実し、切磋琢磨、お互いに厳し

く楽しく育て合う集団として発展することを願っている。